



同志社人物誌

(6)

大沢徳太郎

難波紋吉

大正三年のことである。私は向学の志やみがたく、岡山県の片田舎から京都へ出て来た。同志社中学へ入学するためである。

私が京都で、最初に訪ねたのは、当時の同志社社長（現在の総長）原田助先生のお宅であった。先生夫妻の手厚い接待を受けた後、私は河原町三条上ルにあった大沢徳太郎邸へ案内された。私の勉学中、私の面倒を見るよ

うに、原田先生が依頼されていた家庭である。大沢夫人は、私のために設けられた部屋へ私を通してから直ちに私を大沢商会へつれて行った。私は生れて始めて見る洋館の中の立派な部屋で、美しい大きい机を前にして、回転椅子によりかかっている美髯の中年紳士に紹介された。これが大沢徳太郎氏との初対面である。大沢社長は、温いまなざしを私に向け

ながら、『おまえは田舎の学校ではよくできたそうだから、同志社中学の二年生に編入してもらおうよ、原田社長に頼んである。しかし入学試験に英語の会話があるということだが、会話は大丈夫かね』と、尋ねられた。私は一瞬ドキンとしてまごついた。そして『けいわやちうおえんから自信はありません』と答えた。これは私にとって精一杯の卒直な返事であった。社長は私の言ったことが、何のことかわからないような表情をした。そこで夫人は、私にかわって、難波は『会話はできんので、自信がない』と言っておりますよ、と通訳されたのである。そのとき、私は若し入学試験に失敗したら故郷へ帰えされるのではないか、という不安におそわれた。氏は、その温顔に微笑をうかべながら『まあ、せいぜきはつて、試験を受けてみるんだな。入学できたらうちで世話をするから』と激励された。その二日後に、私は受験した。そしてその翌日、波多野培根先生から第二学年へ編入が許可されたことを知らされて夢かと思った。『私は今天下の名門同志社中学の生徒になつたのである』と、意識した瞬間、涙が出てしまった。この時以来、私は大沢善助氏

夫妻と大沢徳太郎氏夫妻の温い庇護と援助の下に、勉学を続け、大学を卒業し、米国で学ぶことができた。まことに奇しき因縁というの外はない。

このようなわけで、まことに失礼な言い方であるかも知れないが、大沢徳太郎氏夫妻は私の父母ならざる父母であり、またその家庭は私の家庭ならざる家庭であった。そしてこのような大沢家と私との関係は今も、なお、つづいている。従って私のような身近な者が

大沢徳太郎氏の人物誌を書くということは、果して適當であるかどうかを考えて、大いに躊躇せざるを得なかった。しかし同時に、同志社が生んだ最も誇るべきキリスト教徒・実業家である氏を、私が紹介する責任があることも、また感ぜざるを得なかった。編輯者の要請を容れて、筆をとることにしたゆえんである。

生い立ち

大沢徳太郎氏は、明治九年二月八日、大沢善助氏の長男として京都市で誕生した。九才の時、父善助氏が分家したので、大沢本家を相続することになり、戸籍上は大沢清八氏の

養子となったのである。（大沢家は、京都において著名であった大親分（俠客）大垣屋清八氏が、京都所司代津藩主松平肥後守の用達となり、苗字帯力を許されてから大沢清八と名乗ったことに始るのである。）

この当時、善助氏の生計は必ずしも安定してはいなかった。善助氏はその頃の思ひ出を自叙伝「回顧七十五年」において、次のように述べている。

『この時分は生計日に難きを加へ、到底、薄利なる白米商のみで家計を支へることができず、殊に子供もできて相当の費用が嵩む上に、養家へ飯米、新炭等を送らねばならなかったため、財政は非常に窮迫を告ぐるに至った。そこで昼は米屋渡世をしながら夜の仕事をし、瀬戸物を夜店で売捌きなどし、これでやっと財政を助けていた。瀬戸物を商う利益は、白米を商うよりは非常に割の多いことを知ったので、断然米商を廃して古道具と滝戸物の商売に変更した。……然して朝は処々の朝市を廻り、夜は四条御旅町辺りに夜店を出し、昼は店頭で商内をなし、所謂、昼夜兼行、随分と勉強したので、相当の利益を得るようになった』

このような苦心と努力の甲斐があつて、善助氏には相當の蓄財ができた。同時に氏の社会的地位も高まった。明治十二年には、上京区第二十五組小学校常務委員、十四年には聯合町会議員、次いで上京区会議員に選出された。また京都府知事北垣国道氏が始めた蹴上の疏水工事にも参画し、十七年には京都府會議員、十八年以来京都商工会議所員、常議員、及び副会頭の重職にあつた。さらに、明治二十二年には市會議員、市参事會員、次に二十三年には府会常置委員となるなど、京都府・市において公職に就き、重要な人物になつていた。

特に注目すべきことは、善助氏が米商をしてきた時代、その居宅が寺町丸太町下ルにあつた關係上、同志社社長新島襄先生宅に出入し、これが機縁となつて新島先生の知遇を受けキリスト教の信仰に入り、明治十三年京都第二教会において、新島先生から親しく受洗した事である。そのみならず、熱心な金比羅信者であつた養父母清八夫妻と妻み津をも信仰に導いて受洗するようにした。このような關係で善助氏は、明治十八年新島先生の懇請を容れて同志社社員（現在の理事の如きも

の)となり、更に十九年には、同志社女学校の幹事となつて、その経営にも与るようになった。従つて徳太郎氏が明治二十一年、小學校を抜群の成績で卒業するとともに、彼を道ちに同志社予備校に入學せしめ、また翌二十七年には新島先生から受洗せしめたのは当然のことであつた。ところで、この頃まで極めて順調に連んでいた善助氏の生活は事業の失敗により、再び経済的困難に陥つた。他方、徳太郎氏はその健康がすぐれなかつたので、在校わずか四カ年にして同志社を退學した。その時十七才であつたが、善助氏がやって来た時計製造業に従事するようになり、その手始めとして、名古屋の時計製造工場へ実習見習として送られた。一カ年の修業の後、父から時計製造業の一切を引受けることになつた。漸次、業績があがるにつれて、職人も八九十人を数えるに至つたが、その労務は職人と何等選ぶところがなく、自らあらゆる仕事に従事した。同時に徳太郎氏は、経営者として、今までやって来た単なる時計の組立作業を、時計製造の一貫作業にきりかえて、部分品の製造から仕上に至るまでの全工程を、同一工場内で、完成する方法を採用した。更に、

時計の製造だけでなく、外国製の懐中時計を輸入してその卸売業を始め、また外国製の自転車や高級調帯の代理店を開始するなど目覚ましい業績をあげるようになった。この間、父善助氏は京都電燈会社を創立してその社長に就任し、かねて府会議長、市會議員、商業會議所副会頭等の要職についたため、大沢家の事業は専ら徳太郎氏に任せられた。そして明治二十五年、氏は若冠二十一才にして、三条小橋に新店舗を設け、大沢商会と称し、その基礎もできたので、その後、海外視察旅行にも出て、大いに見聞も広めた。

同志社理事として

大正八年、大沢商会は個人商店から株式会社に組織替して一層の発展を遂げ、昭和十四年、株式会社大沢商会の創立二十周年を迎えた。また徳太郎氏はこの間貴族院議員に再度当選したので、これらを機会に、大沢商会社長を辞し、その一切を令息善夫氏に譲り、専

ら政治と社会奉仕のために精進することになった。

このように徳太郎氏は、その生涯の大部分を大沢商会の経営と発展に捧げたのであるが、その高潔な人格と優れた識見とは、多くの人々の認識するところとなり、大正の初期から政治・経済及び教育・文化等の領域においても活動することになった。氏は極めて謙虚にして、野望をいだくような人柄ではなかつたから、自ら求めて京都商業會議所の会頭に就任し、また貴族院議員に出馬したのではない。全く友人・知己の推挙と從憑によつたもので、自らの発意ではなかつた。また氏は母校、同志社の理事に選出されて、長い間、教育・文化のためにも奉仕した。大沢家と同志社の關係は前述の通りであるが、この關係は善助氏に始り徳太郎氏を経てその令息善夫氏に及び、祖父・父・子の三代にわたつてつづいているのである。

徳太郎が理事となつたのは、大正三年十二月から大正八年十一月までと、大正十二年四月から昭和十七年五月まで、いわば、東上の車中永眠されるまでであつた。その間、氏は資産管理委員、評議員及び常務理事等を兼

ね、職制の改革、寄附行為の改正、大学令に基く大学への昇格、岩倉の土地買収と高等商業学校の移転、教育綱領の制定、講堂や校舎、寄宿舎及びパイプオルガン等の建設等にわたる重要事項の解決に参劃し、誠心誠意、殆んど欠席することなくこの職責を果した。

とりわけ、氏の在任中に、屢々起つた、いわゆる『同志社騒動』の処理は氏の手腕にまつところが多かった。その最も顕著なものは原田騒動、海老名騒動及び湯浅騒動であった。いづれも時の社長や総長を中心として起つたものであるだけに、騒動はいづれも深刻な様相を呈した。

ところで、徳太郎氏はこれらの何れの騒動の時においても理事として関与した。特に在京理事としてのその責務を痛感し、その労苦は想像に余るものがあった。しかるに氏は、これらの問題から決して逃避することなく、恰も自己の問題であるかの如く憂慮し、真心をもって、常に最善をつくしてその処理に努力した。氏は何れの側にも偏することなく、事態を客観的に静観し、多くの者の意見を徴し、公平無私な態度を決して失わなかった。蓋しその念願とするところは、専らキリスト

教主義学園としての同志社の維持とその発展にあつたからである。それ故に、氏は原田助社長を擁護し、海老名弾正総長をかばい、湯浅八郎総長を援助することに生命を惜しまなかつた。いわば氏は理事であるが故に時の社長、総長を支持したのでなく、彼等の主張や精神がよりよく同志社の立学の精神や伝統にかない、キリスト教主義学園としての同志社の維持・発展に役立つと確信したからに外ならない。特に、湯浅騒動に際しては、一度官憲の誤解や激鱗に触れるならば、罪なくして『非国民の』の烙印を押されてその社会的地位を失う危険があることを自ら意識しながら、湯浅総長を援護したのである。このような態度を明にした理事は、おそらく徳太郎氏のみではなかつたかと思う。氏はまことにキリスト教的勇者であつた。氏が平素何事につけ、最も嫌悪したところのものは嘘であり誤魔化しであつた。

善夫氏は、
『父は純粹な京都人で而も極めて地味な実業家であつた』が、『反面頗る進歩的な氣概に富んで居た人』であつたと言ひ、また『一人息子で両親の絶大な寵愛を独占して

居た父は、幼少の頃は仲々の癩癩持ちであつたとの事である。併し晩年は、少々氣に入らない事があつても、自分の肚の中に圧えて、容易に感情を外へは表わさなかつた。併し若し誰かが嘘を言つて誤魔化さうとする事があると誤魔化しに対しては父は激怒して、大声を上げて叱りつける事が稀乍らあつた』と述べている。

また湯浅八郎氏は、
『私が同志社問題で苦んでいたとき、始めから終りに至るまで、何等変るころなく、当時の非常に困難な事情にも拘らず、私の立場を理解され、私に希望と勇氣を与えられたのは大沢徳太郎氏であつた。私は大沢徳太郎氏の高潔な人格とともにそのうちに包蔵する偉大な信念に対して、敬仰の念じ得ないものである』と氏を賞讃しているのである。

徳太郎氏は多くの人から単に温厚篤実で円満な人物であると見られていたが、しかし、氏の他の側面である強固な意志や強い正義観の持主であつたことを見逃してはならない。同志社騒動において表明された氏の態度は、正義の味方であり、正義のためには利害得失

を度外視して正論を吐き、合理的解決を望み、自らの信念を決してまげることなしなかつた。真に信念と勇氣をもつた人物であつたといつてよいのである。また氏は、同志社が財政的に困つてゐるときは、その個人的資財を提供して補填の責に任ずることも少くなかつた。昭和十二年、氏が父善助氏の旧邸を、これに金一万円を添えて同志社厚生館の建設のために寄附したことは既に知られてゐるところである。また昭和十七年、その永眼に際し、嗣子善夫氏が故人の遺志として遺産五十万円を同志社職員の厚生資金として寄贈したが、これは同志社がかつて一個人から受けた寄附金のうち最大のものであつた。

その家庭生活

徳太郎氏の家庭生活は実に美しいものがあつた。氏はまことに『良き子、良き夫、良き父』であつた。

善助氏は、

『私は伴徳太郎とは長い間何等の争もしたことが無く、またする必要もない。それは、私は平生徳太郎のすることに感心して居るので何も不足を言う所はない。徳太郎

も亦私のする事に感心して居ると見えて、何の不足も言わないからである。若し、お互の目にあらを見付け出そうとしたならば、それは神でない以上、幾らもあるであらうか、私達親子は互に感心し合つて満足してゐるので、左様な余計な事をする必要がないのである。したがつて世間によくある親子喧嘩などの味は少しも知らない。』とその『回顧七十五年』のうちで述べてゐるところで、このような父に対して、徳太郎氏はどのような感じをいだいてゐたであらうか。

『父は私を愛し、私を信じ、大抵のことは私の希望を充たしてくれた。また私も父を敬し、父を信じ、成るべく多くの心配をかけぬようにと心懸けた。したかつて親子の間には何等の秘密もなければ、些かの障壁もない。吉凶禍福、ともに語り、ともに楽しみ、ともに慰め合つて今日に至つてゐる』と告白してゐる。

なんとこの圓滿な父子の間柄であらうか、私の知る限りでは、徳太郎氏は夫人や子供を伴つて、差支えない限り、日曜日には必ず教会に出て厳肅に礼拝を守り、午後には善助

氏夫妻を訪問して慰めるのを常としていた。

徳太郎氏が、また愛妻家であつたことは人のよく知るところである。幸恵夫人はその父鈴木清氏が、新島先生の支配人として關係してゐた神戸女学院に入学し、ここでキリスト教的・西歐的教養を身につけて卒業し、十八才にして徳太郎氏に嫁した当時、大沢家には善助氏夫妻の外に養祖母ぬいがいた。ぬいは幕末の大親分大沢清八の妻として、多くの俠客を手がけた女丈夫であつただけに頗る封建的であり、また厳格であつた。幸恵夫人はよくこの家風にたえて、朝五時には起床し、終日家事万端をきりまわし、時計工場の荷造りや発送までも手伝つた。当時、職工のうちの見習工に対しては、いわゆるおしきせ、制度があつたため、寝食から被服に至るまでの一切の面倒を見なければならなかつた。女中はいたもの、三度の炊事毎に一斗以上の米を焚き、副食物を用意することは並大抵ではなかつた。徳太郎氏も七時には必ず工場へ行き、自ら旋盤を手にし、夫人は通信や記帳の手伝いもしたのである。

このようなきびしい封建的な生活の中にあつても、夫婦愛は乱されなかつた。そのこま

やかな愛情は近隣の目をそばだてた。日曜日がまだ休日でなかった当時においては、夫妻がそろって教会へ行く姿を見て『今日は日曜日らしい。大沢さんの若夫婦が通らるは』と言ったほどである。そしてこのような夫婦愛は晩年に至るまで変らなかつた。

幸恵夫人は次のように述懐している。

主人は『中年以後、公私の関係で宴会が多く、自然に美食を摂り、多少の酒も飲んだようですが、日曜だけは必ず家族一同との会食を楽しみ、家庭では一切晩酌というのは採らず、喰べものにも好き嫌いは言わず、なんでも手料理で満足してくれ、決して家庭を煩わしくしない。まことにし易い人でした。ただ家庭が中心にならなかつたのは、夫の唯一の趣味であつた囲碁と将棋だけ……』

次に子の側から見た徳太郎氏はどのように写つていたであろうか、令息善夫氏はつぎのように述べている。

昭和十六年満州旅行の途中発病して喘息にかかつたのであるが『私が病中一番苦しめたことは両親に大変な心配をかけたことであつた。……実際私はこの齡になつて始

めて子供が病氣する事程大きい親不孝はないことを知つて、内心大いに恥ぢ、かつて申訳がなく思つたのである。父は私が聖路加病院に入院中、上京毎に、如何に忙しい日でも一日に一度は必ず訪ねてきて呉れた。……』

『父は晩年「温厚篤実」の人とか「円満高潔」の人物とか言われて居た。実際に私の父程立派な人格を持った人は少いと思つてゐる。ただし父の晩年のある円熟した人となりは、決して自然に持つて生れた性格ではなくて、実に父の不断の修養と修練の結果であつたと思われる。』

徳太郎氏はまさに自己鍛錬の人であつた。キリスト教の家庭で育ち、新島先生から洗礼を受け、キリスト教の家庭からその妻を迎えたのであるから、当然に、その生活は信仰的にならなければならなかつたようにも考えられる。しかし、それだけで一生涯を信仰生活で貫き得ないことは世の中の事例によつて明である。氏は忍耐と精進と強い意志によつて自らをつくりあげたのである。氏は毎朝顔を洗つた後、聖書をひもどき、敬虔な祈を捧げ、その後多くの新聞に目を通し、書翰や文書の

整理にあたるのを常とした。そして聖書の中でとくに感銘を受けた聖句は、これを手帳に書きとめて繰り返し読んだ。日曜日にはつねに教会に行き、役員として誠実に奉仕した。再び善夫氏の言葉を引用する。

『父は生涯の大半を実業家として過し、晩年には社会各方面に広く活躍した上、最後の十年間には政治にも関与して、頗る多岐な生活を送つた人であり、また各方面において夫々相当な成績を成し遂げ功績を残して居る。ただし、今私は父の一生を顧みて、最も大きく、かつて尊く感じるものは、父の事業家としての功績や政治家としての活動ではなくて、実に父が一生を通じて終始一貫常に正しい人間として、正しい人生の道を歩み続けたことである。父よりも以上に大きい成功を遂げ、功績を残した事業家や政治家は世の中に数多くある。ただし、父程真剣に神を敬い、神を信じ、人間として正しい真面目な生涯を送つた人は他に甚だ少いと思うのである。これが私の父に對する一番大きい誇りであり、また、父が私達に残して呉れた最大の遺産である、と思つて居る。』

キリスト教的勇者

徳太郎氏の代名詞はさきに触れたように、『温厚篤実』な人であつた。しかし氏が折にふれて書き残した感想録を見ると、そのうちに『温厚篤実の人は最も尊敬に値することやう迄もなし。されど斯かる性格の人は往々勇氣と決断を欠く。また剛毅果敢の人は進取英断の氣風に富むも、其人格において、兎角円満を欠き敬服できざる場合多し。兩者共悟るところなかる可からず』と述べている。これによつて見ても、氏が單なる温厚篤実の人であつただけでなく、機に応じて勇氣と決断の人であつたことがよくわかる。

また氏は『イエス』は言い易いが『ノー』は言い難い。しかし『ノー』を明確に答え後る者はえらい人である……『イエス・ノー』を明確にせぬこともつて社交上の要訳としてゐる人もあるが、これは正しくない」とも誌している。

古来から、いわゆる手腕家と称せられる人物は決して少くない。しかし手腕家は必ずしも同時に、優れた人物であることは限らない。徳太郎氏が非常に優れた実業家であつたこ

とは、その優れた業績によつて明かであるが、私はむしろ氏を優れた人間として、より高く評価すべきではないかと思う。氏の人格形成の基本的条件は家庭や同志社で準備されていたのであるが、氏の人間形成を貫いたものがキリスト教の信仰であつたことは、疑問の余地がない。しかし氏においては、キリスト教徒としての臭味は微塵も感ぜられなかつた。これは氏の修養の深さを物語るものである。氏においては、キリスト教はその日常生活のうち全く溶けこんでいたように見える。

氏は如何なる階層の人に対しても親しくし、何等の隔りもなく話し、また交ることができた。その地位が高く、富貴なるが故に多くに尊敬し、厚遇するということはなかつた。反対に卑賤なるが故に斥け、疎かにすることもなかつた。つねに富貴に淫せず、威力に屈せず、すべての人間を『人間』として尊敬した。従つて氏には敵はなかつた。あつたかも知れないが、氏の意識には敵はなかつた。

氏はまた親切であり、情誼深く、約束をたがえず、争わず、怒らず、驕らず、咎めず、妬まず、しかし責任感は強く、脈々と流れ出る

その温情はその周囲をあたためて春風駘蕩の雰圍氣を醸成した。ここでは平和が支配し、凡てのものは、それぞれ生かされて大和の中に帰一するかのようであつた。しかし、この人格は氏に天賦のものではなく、神を虔れ、神を敬い、神を愛し、同時に隣人をも愛する信仰の賜に他ならなかつた。まことに氏はキリスト教を修身の巧みとして自らを練磨した練達の人であつたのである。

(校友・神戸女学院々長)

